

「仲仕組創立紀念之碑」 解釈

石碑の風化が著しく、欠落し文字、崩れて判読不能の文字が多数あり全文解読は不可能です。現時点での碑文解読を紹介します。今後、不明文字が明らかになれば、より正確な解読も進むでしょう。

とりあえずたたき台となればと思っています。

尚、●は欠落箇所、○は推測文字です。

「仲仕組創立紀念之碑」 碑文

明治三十年秋九月鐵路竣工瀕車始通爾來瀕運一變千里比

隣旅客來往物貨輻湊寂寥之地忽化而為繁華之區實是昭代

之賜也可不謂傳矣續於是碑●所鐫諸子●大●●●●●●●

之中糾合同志而間六十有預餘創設仲仕組從事物貨運輸之●

五年千茲●商賈賴其●遠近●集便宜乎業務日進月●●●

殷々乎不止獨●我地方之大士不知應用文明之利器而殖產

興業所以報國家倫安送日者集何●哉希觀諸士之●可亦以

少愧矣夫人勞心之與勞力二者雖殊所以其端國家一也●●

與所●而無慙焉何暇論心身之優劣余將刻同志姓名於石而

傳千古何不可也銘曰

鑿山架水 鐵路完成 飛烟汽笛 瞬開車輶 記參六十

欲●開明 運物輸貨 ●●日榮 屹一片石 ●●●●

明治三十四年夏七月 ●● 鷗村 小史 撰

解釈

明治三十年秋九月てつろしゅんこう きしや とおりはじめ じらい いっぺん せんり ひり んりよきやく おうらい鐵路竣工汽車 始 通 爾來一變千里比隣旅客來往

物資輻湊

※千里比隣・・遠く離れた地が近くに感ずる。輻湊・・四方から集まること。
解釈 明治三十年九月鐵路竣工。汽車が通り始めて状況が一変、以來遠隔地も近くとなり旅客が往來し、物貨が集まるようになった。

せきりょうのちたちまちかすな すはんかいのく とじつにこれしやうだいのたまものなりとのいいつたまかな
寂寥之地忽化而為繁華之區 實是昭代之賜也 可不謂傳矣

※昭代・・みよ繁榮する御代

解釈 寂寥の地が忽ち化して繁華の地と為す。このことは実に繁榮する御代（昭代）の賜と謂えよう。

績於是碑●所鑿諸子●みよ○●●●●●●●之中

※績・・業績 鑿・・掘る。
欠落、不明文字多く不明ながら

解釈 諸君がこの機会を捉え、立ちあがらんとする いさお績を碑に刻む。とりわけ

きゅうごうどうし ろくじゅうゆうよそうせつなかしく みじゅうじぶつ か うんゆ
糾合同志而聞六十有餘創設仲仕組從事物貨運輸之●五(年)千茲●

(・・●五(年)千茲●・・は解読できず)

解釈 志を同じにする者六十有余を糾合し仲仕組を創設、物貨運輸に従事せんとすることは.....。

しょうばいたよるその商賈頼其●べんぎ遠近●ぎょうむにつしんげつ集便宜乎業務日進月●●●●

解釈 事業（商売）は遠近の集荷を鐵道に頼ることにより、弛まず發展する（鐵道）業務から恩恵を得られるであろう。

しんしんと ひとりとどまらず駸々乎不止獨●ちほうのだい しふちおうようようぶんめいりき我地方大士不知應用文明利器

解釈 速やかであり止まらず。我が地方の有志は文明の利器を応用する知識を習得し、

而殖産興業所以報國家倫窓 送 日者集 何 ●哉希觀諸子之●可

解釈 殖産興業に役立てることが国家に報いる倫であり、日頃より安全運送で

集荷する諸君の●は希觀ことなり。

亦以少愧矣 夫の勞心與勞力二者 雖殊 所以其端國家一也●●

與所●而無慙焉 何論 暇心身之優劣 余將刻同志姓名於石而

※ 少愧・・・少しも恥じることはない、転じて誇りとする。

※ 勞心・・・頭脳労働者（管理職） 勞力・・・肉体労働者（現場職）

解釈 又、この業務には管理職と現場職の二者があると雖も両者とも（その仕事を）誇りとすべきである。なぜなら夫々が国家第一の心に依る所から端を発しているからである。であるから私に両者の心身の（管理職、現場職の）優劣を論ずる暇などあろう筈もなく、将に同志の姓名を石碑に

傳千古何不可也銘曰

解釈 銘し^{永遠}千古に伝えることに何の不都合があろうか。

漢詩

鑿山架水 鐵路完成 飛烟瀛笛 瞬間車輞 記參六十

※記参・・・名を記し参加した者。

解釈 山を^{うが}鑿ち河に架橋して鐵路が完成した。^{けむり}烟を飛ばし汽笛をならし

汽車は瞬時に走る。記参した六十名は

欲路開明 運物輸貨 ●●日榮 屹一片石 ●●●●

解釈 鐵路がどこまでも開かれることを望む。物貨が運輸されて、日々榮えんことを期待し、一片の石を^{石碑}屹立して、績を後世に伝える）

明治三十四年夏七月

●●●●

鷗村 小史 撰

注) アンダーライン部分は推測による創作。

碑文全文（大意）

明治三十年秋九月鉄路竣工。汽車が通り始めて状況が一変、以来遠隔地近くとなり旅客が往来し、物貨が集まるようになり、寂寥の地が（鉄道開通によって）忽ち、繁華の地となった。このことは実に繁栄する御代の賜である。

諸君が是の機会を捉え、立ちあがらんとすることを称え、^{いさお}績を碑に刻む。とりわけ志を同じにする者六十有余名を糾合し仲仕組を創設し物貨運輸に従事せんとすることは此の地の発展に寄与するであろう。

事業（商売）は遠近の集荷を鉄道に頼り、弛まず発展する（鉄道）業務から恩恵が得られる。その技術の進歩は速やかであり止まらない。我が地方の有志はこの文明の利器を応用する知識を習得し、殖産興業に役立てることが国家に報いる^{みち}倫であり、日頃より安全運送で集荷に携わる諸君の努力は希に見るものである。

又、この業務には管理職と現場職が従事すると雖も両者とも（その仕事を）誇りとすべきである。なぜならそれぞれが国家第一の心に依る所から端を発しているからである。であるから私に両者の心身（管理職、現場職の）優劣を論ずる暇（必要）などあろう筈も無く、将に同志の姓名を石碑に銘し永く伝えることとする。

漢詩の解釈

山を^{さく}鑿し河に架橋し、鉄路が完成した。^{けむり}烟を飛ばし、汽笛を鳴らし汽車は瞬時に走る。名を連ねた同志は、鉄路が何処までも開かれることを望み、物貨が運輸されて、鉄道が日々栄えんことを期待し、一片の石碑を屹立して、績を後世に伝える。

明治三十四年夏七月

鷗村 小史 撰